

MIGA コラム「新・世界診断」

## 「荒野の七人」対G7—独禁政策とAIをめぐる攻防—

岡部直明

武蔵野大学国際総合研究所客員研究員

元日本経済新聞主幹



1947年高知県生まれ。69年、早稲田大学政経学部卒、日本経済新聞社入社。東京本社編集局産業部、経済部記者を経て、ブリュッセル特派員、ニューヨーク支局長、取締役論説主幹、専務執行役員主幹、コラムニストを歴任。この間、早稲田大学大学院客員教授を務める。主な著書・編著に「ドルへの挑戦—Gゼロ時代の通貨興亡」「主役なき世界—グローバル連鎖危機とさまよう日本」「応酬—円ドルの政治力学」「ベーシック日本経済入門」（いずれも日本経済新聞出版社刊）、「EUは危機を超えられるか 統合と分裂の相克」（NTT出版、2016年）、「分断の時代—混迷する世界の読み解き方」（日経BP、2019年）ほか。

黒澤明監督の「七人の侍」には及びもつかないが、米国のリメイク版、ジョン・スタージェス監督の「荒野の七人」も痛快な西部劇だった。その原題は「ザ・マグニフィセント・セブン」。世界経済を牛耳るマイクロソフト7社の呼び名になっている。その経済パワーは米国を除くどの先進国も及ばない。「荒野の七人」対G7（主要7カ国）の攻防は、独禁政策から人工知能（AI）まで、資本主義の在り方と人類の英知を問うものである。

## 「ザ・マグニフィセント・セブン」

世界の金融市場で、マグニフィセント・セブンの呼び名を聞くことがよくある。GAFAM（グーグル、アップル、フェイスブック＝メタ、アマゾン）にマイクロソフトの先行5社に電気自動車のテスラ、半導体のエヌビディアを加えたビッグテック7社のことである。世界経済を動かすだけでなく、G7を中心に国家そのものにも大きな影響力をもつにいたっている。

なにしろ、その時価総額は合計11兆<sup>ドル</sup>。G7のなかで、一国で対抗できるのは米国のみである。日独はじめ、他の先進国の名目国内総生産（GDP）を大きく上回る。皮肉にも、世界最悪の借金大国である日本の公的債務残高に匹敵する。

## 「七人の侍」と「荒野の七人」の違い

世界の映画史に永遠に残る黒澤の「七人の侍」と「荒野の七人」を単純には比べられない。荘厳な早坂文雄の音楽と軽快なエルマー・バーンスタインの音楽は対照的である。「七人の侍」のタイトルバックで、一人で紹介されるのは、主役の志村喬でも三船敏郎でもなく、黒澤

と早坂の二人だけである。いかに音楽が重きをなしていたかがわかる。

「七人の侍」と「荒野の七人」が決定的に違うのは、侍たちが無償で村人たちを支援したのに対して、ガンマンのなかに「金鉾目当て」の人物がいたことだ。主役のユル・ブリナーやスティーブ・マックウィーンと違って、最も地味なブラッド・デクスターが演じていたのが面白かった。

ラストシーンも違う。「七人の侍」ではどしゃぶりのなかでの壮絶な闘いのあと、うそのように晴れた日に、村人たちは田植えで喜びの歌をうたう。そこには村の日常があった。それをみて首領の志村が「勝ったのはあの百姓たちだ。わしたちではない」という。

これに対して、「荒野の七人」ではガンマン志望の若者（ホルスト・ブッフホルツ）は村娘のもとに走り村に残る。こちらはハッピーエンドだった。

### なぜ「荒野の七人」が生まれたかーイノベーションの行き着く先

それにしても、なぜ「荒野の七人」は生まれたか。そこには、経済学の巨人、シュンペーター教授が唱えたイノベーション（新結合）の行き着く先が結局、独占だったという歴史の皮肉がある。

1912年、シュンペーターは「経済発展の理論」のなかで、イノベーションにあたる新結合について①新製品の創造②新生産方式③新市場の開拓④新材料の獲得⑤新産業組織の5分野をあげ、企業家の革新が経済発展の原動力になると説いた。しかし⑤の新産業組織は、独占を容認するものともいえる。

産業革命のあと、本源的なイノベーション（発明）より、既存技術の組み合わせによるイノベーションが重視される傾向を生んだ。それはいまに続く。「荒野の七人」の発展は新興企業の買収によって、かえって技術革新の芽を摘む結果になっている。独占による優越的地位の乱用も目立ってきた。

### 遅れすぎた独禁政策

米ビッグテックの独占化が急速に進む中で、先進国の独禁政策は大幅に出遅れた。独禁政策は、ターゲットになる巨大企業にとっては「規制」と映るかもしれないが、自由で公正な市場経済を維持するためには、欠かせない政策である。資本主義の土台といえる。

資本主義のメッカである米国では、本来、共和党政権の切り札になっていいはずだ。ところが、米国では、トランプ前政権はビッグテックの独占化を放置してきた。独占化に目を光らせ始めたのは、民主党のバイデン政権になってからである。ビッグテックはG A F Aの時代から「荒野の七人」の時代になっていた。

2023年9月、米連邦取引委員会（F T C）は反トラスト法違反の疑いで、アマゾン・ドット・コムを提訴した。独占的地位を乱用して外部の出店者に様々な圧力をかけたためである。バイデン大統領に抜擢された若いリナ・カーン委員長はもともと「アマゾン帝国の解体」をめざしてきたが、提訴でやっと最初の1歩を踏み出した形だ。

日本の公正取引委員会も米ビッグテックの動向には敏感だが、その対応は慎重だ。アマゾンに独禁法違反行為をやめさせ、グーグルを独禁法違反の疑いで審査し始めたが、調査を先行させる手堅さは日本らしい。それをビッグテックがどう受け止めているかが問題である。

かろうじて欧州連合（EU）の欧州委員会は「反独占」に立ち上がっている。アマゾンやグーグルなど米ビッグテックに照準を合わせて規制導入に動き、2022年11月には、自社製品の優遇を禁じるデジタル市場法を発効させた。ただし、欧州委員会の出方は、この分野で米国に大幅に遅れたEU側のけん制という見方があるのは事実だ。

EUが先導したデジタル課税は、巨大企業の課税逃れを防ぎ、企業の生産・販売の拠点がなくても、一定規模の多国籍企業に課税できる仕組みだ。2025年の発効をめざすが、米ビッグテックを抱える米国の上院の3分の2を得なければ、批准できず、実施までになお曲折がありそうだ。

そうしているうちに、「荒野の七人」はますます発展し、「ウイナー・テイク・オール」（勝者総取り）という風潮が根を張る危険がある。

### 「AIルール国際政治学」を超えて

「荒野の七人」がいまこぞってめざすのはAIの世界である。それは人間の知恵を超え、新たな可能性の地平を開くと同時に、誤情報の拡散や差別の助長などリスクを持ち込む。AIが人間を支配するのではないかという危機感は従来のイノベーションの範囲を超えている。

うれしい話題もある。AIの活用で、ビートルズのジョン・レノンのテープ音源が再生され、ビートルズの新曲「ナウ・アンド・ゼン」が現代に生まれた。将棋の藤井聡太八冠がその才能のさらに向上させているのは、AI超えをめざしているからでもあるだろう。

その一方で、ハリウッドの俳優組合や脚本家組合がAIで仕事を奪われたと長くストライキしたように、大きな影響をこうむるリスクもある。

国際政治学者のイアン・ブレマー氏はAIには、偽情報、拡散、大量解雇、人間の代替のリスクがあり、国家にも個人にも脅威になると警告する。AI推進の先頭に立つテスラのイーロン・マスク氏でさえ、「AIは人類にとって最も大きな脅威の一つだ」と述べている。

日本には、むしろ「AI後進国」ととどまるのではないかという危機感の方が強い。この分野の大学教授たちは学生の論文やレポートがAI作成になることを警戒しながらも、ほとんどがAI推進を強調している。

では、AIのルールをどう決めるか。そこには「AI国際政治学」がうごめいている。バイデン米大統領は、生成AIの安全性の確保と技術革新を図るための大統領令を発令した。開発企業は、サービスの提供や利用の開始前に、政府による安全性の評価を受け

るよう義務付ける。AI規制が法的拘束力をもつことになる。このAIルールを多国間ルールにするよう働きかける方針だ。

これに対して、EUは包括的なAI規制案を打ち出している。規制案はAIのリスクを4段階に分け、潜在意識の操作や子供の搾取に使う場合などは禁止する。違反企業には制裁金を科す。米国ルールには罰則規定がなく、企業への配慮が滲むが、EUルールは企業にとっては厳しい内容になっている。

EUを離脱した英国も独自の動きをみせる。29カ国・地域の閣僚級を招いて「AI安全サミット」を開いた。AIの世界で一方の雄になる可能性のある中国が参加したのが特徴だ。安全性審査の必要性などで基本合意し、継続して開催される。

やや影の薄いのは広島サミットを受けてG7が取り組んできたAI行動規範だ。開発企業に市場投入から利用までの各段階でリスクを低減するよう求めるなど、米欧の共通項でまとめた。

問題は米・EU・英・日など各国・地域がつばぜり合いを演じている間に、「荒野の七人」がAI開発を先行させてしまうことだろう。一見効果的にみえるAI規制も「後追い規制」では意味がない。「AIルールの国際政治学」を超えて、先進国・地域はどこまで「荒野の七人」のAI開発に先回りできるか。「国家の役割」が試されている。

### AI兵器の禁止を急げ

世界はいまウクライナ戦争と中東危機という「2つの戦争」に直面している。国連のグテレス事務総長は7月に安全保障理事会で人間の判断に基づかず殺傷する自律型AI兵器を禁じる法的な国際的枠組みを2026年までに合意するよう提案したが、「2つの戦争」でその切迫度はさらに高まっている。2026年では遅すぎる。AI兵器は核兵器と同様に科学とは何かをわれわれに問いかける。科学の退歩そのものである。科学的精神と人道主義にもとづいて、人類の英知がいまほど求められている時代はない。